

先進校に学ぶキャリア教育の実践

進路指導部が授業改革も後押しする 進学校の日常型キャリア教育

— 三重・県立 津高校 —

津高校が取り組んでいるのは、イベント型ではなく、日常型のキャリア教育です。プロジェクト学習やジョブシャドウイングなども行っていますが、それはキャリア教育の一部分との考え。授業や部活動・学校行事を含めた学校生活全体をキャリア教育ととらえ、30年後の三重県を支える、志をもったリーダーの育成を目指しています。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

- 日常型キャリア教育
- 自主・自律
- 教員組織改革
- アクティブラーニング
- 地域連携
- 高大連携
- ジョブシャドウイング
- SSH
- 研究指定校

伝統校が抱いた 環境変化による危機感

三重県内で有数の進学校である県立津高校。多様性のなかで自主自律の精神を育ててきた伝統的な同校教育は、「ひと癖ある生徒たちが個性を存分に発揮でき、良い意味で、化ける。卒業後はもっと、化ける。」という、同校卒業生でもある3学年主任平賀美津雄先生の話が端的に表している。

地域の伝統校が環境変化への対応に苦慮する例はよくあるが、津高校も例外ではない。しかし同校の場合は、目の前の生徒に合わせた教員の連携によって、伝統的な自主自律の精神が盛り返しつつある。

かつての同校は、教科指導力や担任力に優れたベテラン教員が生徒の成長や進学実績を引っ張っている学校だった。しかし、県の方針で教員の転勤サイクルが速くなり、同校には若手を含めて新しい教員が増加。また、少子化が進むなか、入学時の倍率は低下し、幅広い層の生徒が入学するように。進学実績でも人口の多い地域の進学校に押されていた。

危機感をもった同校は、2009年ごろまで理数科などへの学科改編も視野に入れて議論していたが、生徒の多様な個性を伸ばせる普通科を継続する道を選択した。同時に、教員個人の努力に頼るのではなく、学校全体が同じ方向を向いて教育の質を高めていく必要性を共

図1 3年間の進路ストーリー

学年	科目	進路
1年	基礎科目	基礎固め
2年	専門科目	専門知識の習得
3年	実践科目	実践力の養成

指導上の留意事項
高校生としての基本的な生活習慣・学習習慣の定着（時間を守る、挨拶等）
①学年を異学年に突入し、時間を守る、挨拶、掃除等、徹底することが重要。理由物の練習等は中学ではほとんど指導されていない。そのことが学習の遅れを助長していることにつながる。
②家庭学習が絶対必要であることと学習方法を教える。
多くの生徒が、塾等での自身の学習しか経験しておらず、家庭で自ら計画を立てて学習する経験がない。
学習-授業-復習のサイクルが絶対必要であることを徹底し、学習方法を学ぶ。
③英数語をバランスよく学習できるアドバイス。
【実質 平日2時間半、休日4時間】（本職向け講座は平日3時間、休日5時間）
【本職向けの講座を3、5を目標とする】
【本職との両立をはかるためのアドバイスを。】

有。組織的で継続可能な体制づくりに向けて動き出した。学年別職員室から、全学年の教員がデスクを並べる大きな担任室に変更し、学年間で自然に情報交換ができるようにしたことは、象徴的な改革のひとつだ。

リーダー育成を目指し 学校生活全体でキャリア教育

進路指導部でも、10年ほど前からさまざまな改革を推進していた。例えば、卒業時の進路実現を目指して学年ごとに毎月の指導上のポイントをもとめた「進路ストーリー」の作成(図1)や、難関大学を志望する3年生が大学別にグループを形成して切磋琢磨する「大学別グループ」の導入などがある。

「このころから長期的な視点に立つキャリア教育の考え方も取り入れ、大学教授による模擬授業やOB講演会なども始



School Data

普通科 / 1880年創立
 / 生徒数 1077人(男子612人・女子465人)
 進路状況(2012年度実績) 大学66.4%
 就職0.3%・待機33.3%
 三重県津市新町3-1-1
 TEL 059-228-0256
 URL <http://www.mie-c.ed.jp/htu/>

Outline

創立132年の伝統校。制服がなく、自由な校風。校訓「自主・自律」「文武両道」のとおり、生徒の手で復活した体育祭をはじめ学校行事は生徒主導。また、3年生4月時点の部活動入部率は96.3%で、総体まで活動するのが基本。2013年度よりスーパーサイエンスハイスクール(SSH)2期めがスタート。また、同年より文部科学省高等学校普通科におけるキャリア教育の実践に関する調査研究指定校にも選ばれる。

図2 津高校の日常型キャリア教育の概要

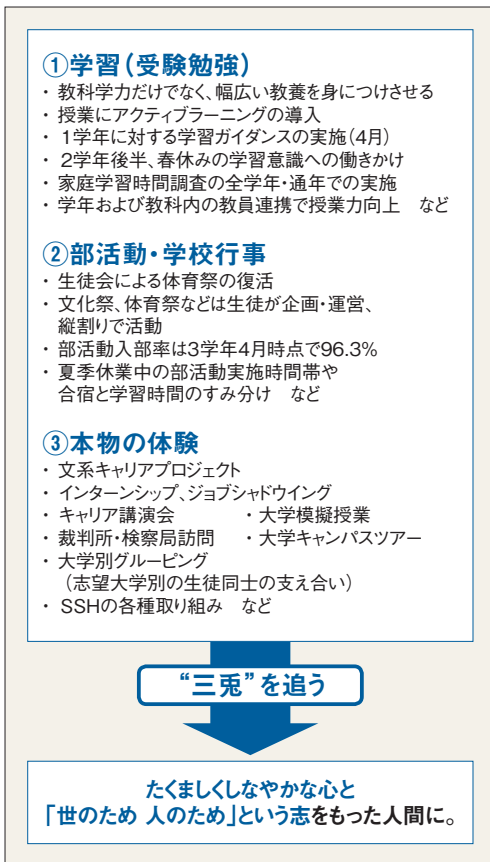
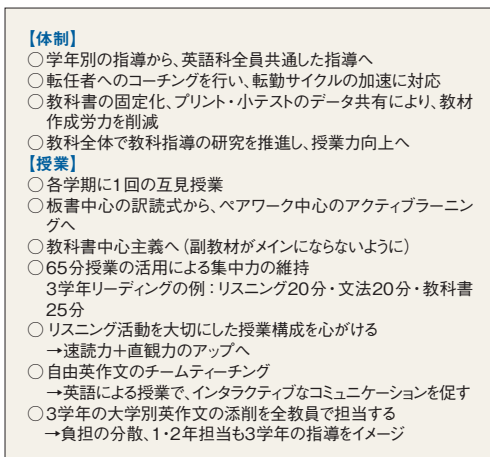


図3 授業改善の取り組み例(英語の場合)



めしました(進路指導部・小野道宏先生)

さらに、上村和弘先生が主任になった3年前、改めて同校としてのキャリア教育を整理して再定義。それに基づいて従来の指導の見直しや新たな施策の導入が行われた。同校が目指すのは、高い知性と教養をもったリーダーの育成。どの大学に入るかではなく、10年後、20年後の社会を支える人材となることに焦点をあて、学習や部活動・学校行事も含めた学校生活のすべてをキャリア教育ととらえている(図2)。

「本校が目指す生徒像に必要なのは勉強だけではありません。関心や意欲、思考力などの見えない・見えにくい学力を育てることによって、点数として見える学力も浮上させたい。そのために、生徒たちが学習、部活動・学校行事、体験学習のいずれにも妥協しない、濃い、高校生活を送れるよう後押ししたいと考えていま

す(上村先生)

この「日常型キャリア教育」には、あらゆる分掌や各教科、学年団が共通認識をもって、教員全体で取り組んでいく必要がある。それを同校ではどのように推進しているのか。「日常」の要となる授業・学習面での取り組み、非日常型といえども軽視していないキャリア教育イベント、そして将来に向けた第一歩につながる進路指導について、順に見ていきたい。

**アクティブラーニングを導入し
生徒が主体的に学べる環境へ**

まずは授業・学習面におけるキャリア教育から見よう。同校では3年前ほど前から、英語科や社会科でアクティブラーニングを取り入れる教員が出てきた。生徒が主体となり能動的に学べる環境づくりの一つとして、進路指導部はアクテ

ィブラーニングに注目。アクティブラーニングのセミナーなどに積極的に参加し、その内容をほかの教員と共有している。教務部でも、アクティブラーニング実践者を講師に招いて研修を開催。アクティブラーニングを導入した教科での学力向上への効果も認められ、現在では多くの授業でグループ学習など生徒が活動し、考える時間がとれている。

家庭学習においても、自律的な学習を促す動きがある。学年団が主導し、毎日宿題を出すのではなく「2週間どこまで」といった出し方をするなど、生徒自身の裁量にまかせられる部分を増加。また、自分で考えて必要な勉強に取り組めるよう、13年度の2学年は6月に2週間、宿題をいっさい止めたこともある。

「あまりに忙しいと、何も考えず言われたことをやるだけで精いっぱいになってしまいます。生徒に時間を預けることによ



13年度の文系キャリアプロジェクトでは、町の活性化を推進する町役場職員の話も参考に



生徒会主導で2年前に復活した体育祭をはじめ、学校行事は生徒主体で企画運営される



授業にアクティブラーニングを導入。グループで意見交換や教え合いをしながら深く学ぶ

図4 文系キャリアプロジェクト「西村ゼミ」の概要(2013年度)

テーマ：20年後の三重県を創ろう

第1回 問題提起講義
「今の時代を生きる高校生に向けて」(西村先生)

第2回 大台町役場職員2人による
「大台町役場からの思い」講演

第3回 多気町役場職員
「(高校生 レストラン)のモデル」による講演

第4回 「20年後幸せな三重県になる施策を創ろう」
一次プレゼン

第5回 「20年後幸せな三重県になる施策を創ろう」
最終プレゼン(提案書提出)

◎オプション(希望者研修)
「三重県信用保証協会研修」

※プランの企画やプレゼン準備、提案書づくりは班ごとに時間をとって自主的に活動

図5 夏休み前に進路指導部が紹介する「自分探し」企画

企画名	主催
①三重大学医師体験	三重大学医学部
②医学部進学セミナー(三重大学医学部)	県教育委員会
③医学部進学セミナー(紀南病院)	県教育委員会
④高校生医療セミナー(津：生協病院)	生協病院
⑤高校生薬剤師体験(津：生協病院)	生協病院
⑥看護職キャリアデザイン講座	三重県立看護大学
⑦看護体験・作業療法体験	近隣の病院
⑧東京大学 キャンパスツアー	津高校
⑨裁判所へ行こう!	津高校
⑩東北交流ボランティア参加	四日市東日本大震災支援の会
⑪県教育委員会インターンシップ	県教育委員会
⑫県広域公募制インターンシップ『三重チャレ』	県教育委員会&NPO法人アトリオ
⑬仕事密着体験	県教育委員会
⑭NHK津放送局 現場訪問	津高校
⑮三重大学サマーセミナー	三重大学
⑯地域が応援する 高校生セミナー	津市商工会議所・県教育委員会
⑰各大学オープンキャンパス	各大学
⑱難関大卒業生座談会	津高校
⑲大学模擬授業	津高校

学年、教科内の連携により教科指導力をアップ

つて、自分自身をコントロールする方法を身につけてほしいと考えています」(2学年進路担当・林仁大先生)

生徒の自律を促すには、単に自由を与えるだけでなく、生徒一人ひとりの状況を把握してかわつていく担任の力も重要だ。進路指導部は13年度に担任力向上セミナーを4回開催。「東大志望者育成に向けてのかかわり」「効果的な志望理由書作成のための指導とは」「模試成績個票からいかに生徒のやる気を引き出すか?」「模試を活用しての効果的な面談法」をテーマに、外部講師を招いて研修を行った。

アクティブラーニングのような新しい取り組みが急速に進んだ背景には、各教科の教員、学年団の連携がある(図3)。もともと同じ教科の担当者全員の授

業が空く時間を週に1時間設定して教科会議を行っていたが、教科内の連携が強まったのは、その時間に互見授業などができるようになったことが大きい。これにより、アクティブラーニング導入を含めた指導方法の改善につながった。また、教科書は基本的に前年と同じものを使用し、教材・プリントを教科内で共有して改善を加えて継承していく体制を整備。教材づくりの時間を省き、新しい取り組みに挑戦しやすくしている。

学年団の連携強化は、進路指導部が模試の全科目・クラスの結果をオープンにしたことがきっかけの一つだ。それまでは担当教員が特定されることへの配慮があったが、オープンにすることは結果のない科目の個人攻撃がねらいではない。3学年を束ねる平賀先生はこう話す。「生徒の進路実現のためには、全教科・科目の状況把握が不可欠。遅れている教科・科目があれば、学年全体で支援するために活用しています」

例えば、進んでいる教科・科目の宿題を減らし、その分で必要な教科・科目の家庭学習を促すなど、学年全体で調整する材料として活用。また、伸び悩んでいるクラスがあれば、そのクラスをどう盛り上げるか、学年全体で検討するなどの動きにつながっている。

地元の大人とかわりながら答えのない問題を考える

次に、課外活動などのイベントにおけるキャリア教育についてはどうだろうか。日常的にキャリア教育を行う同校だが、1年生の進路希望調査に「教師」や「医者」ばかり並ぶといった、働くイメージの未熟さを問題視し、職業観、人生観を培うための体験・探究の機会を数多く設けている。そこで大切にしているのは、「本物の大人との出会いから地元を軸足を置いて世界を観ることだ。」

代表的な取り組みに「文系キャリアア

プロジェクト」がある。理系分野はSSH指定による多彩な体験の機会があるのに対して、文系の生徒たちの志を育むプロジェクトとして11年度にスタート。三重大学副学長の西村訓弘教授(地域イノベーション専攻)の協力を得て、希望者の参加により10~11月に5回のゼミ(各2時間)が行われている。テーマには「同校近隣の「大門商店街の活性化」「自分のキャリアプランを考える」など、答えのない問題を設定。地元で活躍する大人とかわり、地元を愛し支える人材を育てることも大きなねらいだ。

13年度は「20年後の理想的な三重県を創ろう」をテーマに、1、2年生19人が取り組んだ。西村教授の問題提起や町役場の職員による講演を聞いて、4つの班ごとに地域を良くするための方法を検討。各班の提案はプレゼンテーションを行って共有する。最後は生徒の提言書を県知事に直接手渡しプレゼンテーションを行った(図4)。

かわかる教員の基本姿勢は、「生徒にまかせること」で、中身にはほとんど口をはさまない。スタート時には多少の後押しが必要だが、軌道に乗ってくると放課後に自主的に集まって活動する生徒の姿がある。

そして、プロジェクトをやりきった生徒には、高い目標に挑戦しようとする意欲がうかがえるという。例えば、プロジェクトを通してやりたいことが具体化した生徒は、志望大学のレベルを上げ、目標に



2学年進路担当
林 仁大先生



3学年主任
平賀美津雄先生



進路指導部
小野道宏先生



進路指導部主任
上村和弘先生

※所属は取材時のもの

Voice

ジョブシャドウイングに参加した生徒の感想

- 会社というのは、たくさんの人々の連携があって成立するものであることが改めてわかった。よってその結果一人にかかっている仕事の重みを実感できた。
- 新しいことに挑戦しないと売り上げは落ちてしまう。→失敗を恐れずに手探りでも挑戦し続ける姿勢が大切だとわかった。
- 働くということは、やらなければならないことがあってそれをただこなすことだと思っていたが、自分のすることが社会にどのように影響し社会をより良い方向に導くことを考えながら働くことが大切なんだと感じた。
- 仕事をしながら学び続けていく姿勢の大切さを教わった。
- 社長さんに「仕事は世のため人のためにするものだ」ということを言われた。進路集会や学年集会で何度も言われたことを言われたので驚いた。
- 自分が働くことで誰がうれしく喜んでくれるのかを、よく考えて働くことが大切だと教わった。
- 大学では学部以外のこともどんどん参加して視野の広い大人になりたい。
- 説明して下さった方は「時間をうまく使う」「あいまいな返答はダメ」「一回の指示で忘れずに覚えておく」ことが大切と教えてくれた。日々の学校の授業や課題をこなす際に活用したい。



向けて努力を始める。

「今の子どもたちは大人と触れあう機会が少ないので、志をもつ大人とかわかれることは大きな刺激となります。時には注意を受けたり、現実の厳しさを教えられることもありすが、それが真剣に考え始めるきっかけになっています」(上村先生)

夏休みの体験活動をリスト化
教員の声かけて参加を促進

文系キャリアプロジェクトのほかには、キャンパスツアーや裁判所訪問なども開催している。12年度からNPO法人の協力を得てジョブシャドウイングを導入。

3月に希望者30人規模で実施されている(Voice)。また、夏休みには県教委や近隣の大学などが企画するインターンシップや職場体験などのイベントも多い。

進路指導部ではこれらと同校オリジナル企画を合わせて「自分探し」夏休みの企画の案内を作成し、夏休み前に生徒に配布している(図5)。

生徒の主体性を重視し、こうしたイベントのほとんどは自由参加だが、担任や学年主任の声かけにより興味をもって参加する生徒もいる。声をかける対象は、「伸び悩んでいる生徒や、ひと皮むかせたい生徒」(平賀先生)、「進路に迷っている生徒や、視野が医学だけに狭まりがちな医学部志望の生徒」(林先生)など。生徒一人ひとりの状況を見ているからこそできる声かけだ。

進学指導のベースを共通化
内容はスクラップ&ビルド

最後に、日常型キャリア教育の要素の一つとしての進学指導について見てみよ

う。以前の学年主導の体制下では、年度による手法や実績の変動が大きいが課題だった。そこで、学年の独自性を尊重しつつ、ベースの部分は進路指導部が共通化することにより、ノウハウの継承や改善が組織的にできるように見直し。進路指導部では、進路ストーリーの改善とそれに沿った指導の充実、夏季課外と総活動の時間のすみ分けや3年6月の総引退後の一斉放課後学習体制への切り替えなどメリハリのある体制の整備、ガイダンスや小論文指導の適時実施など、数々の施策を進めてきた。

このような体制の変更や新しい施策の導入の際、ネックとなるのは教員の負担感だろう。しかし同校では、常にスクラップ&ビルドしていくため、新しいことに積極的にチャレンジできるようだ。まずはやってみる。それで予想以上に負担が大きかったものや、効果が小さかったものは思い切つてやめる。あるいは、新しいことを始める際には何かを捨てる。例えば、昨年度、それまで年4回行っていた校内模試を2回に減らし、1回あたりの作問にじっくり取り組んで問題の質を高められるようにするなど、柔軟に対応している。

目標を高くもつ生徒が増加
浪人生は卒業後もフォロー

進路実績を見ると、近年は浪人する生徒の数が目立つ。13年度卒業生は約

120人が浪人を選んだが、この状況を同校は悲観していない。生徒が高い目標をもつようになったことの表れでもあるからだ。

「本校赴任1年めで3学年の担任になった時、クラスの生徒のほとんどが現役で大学進学しました。しかし、進学後数カ月して本校にやってきた卒業生が、入学した大学に対する不満を語っていたのが忘れられません。それからは、入れる大学に入れるのではなく、成長の可能性に見合う高い目標をもたせて力を伸ばすことを重視するようになりました」(上村先生)

そんな思いで次に担当したクラスでは、約半数が浪人したが、翌年は希望する大学に合格。今、就職活動の時期を迎えた彼らの姿に、上村先生は大きな成長を感じているという。

浪人した生徒に対するフォロー体制も整えた。卒業時、浪人生を集めて激励会を開催。卒業後も3学年時の担任が4月、夏休み明け、12月に各方面の予備校を訪問し、浪人生の激励と指導を継続している。

● 授業改善、担任力の向上、組織力の強化——同校の多岐にわたる変革は、進路指導部が「学校生活全体がキャリア教育」を合言葉に取り組んできたことと無関係ではない。同校の事例は、進路指導部が働きかけることの影響力の大きさを改めて示している。